

# 『地域と公民館——自治への憧憬』の

## 問いかけるもの

飯田市長野原の木下陸奥さん（83歳）がこのほど『地域と公民館——自治への憧憬』を出版した。

木下さんは師範学校を卒業後、県下の小・中及び教育委員会に39年間勤務し、旭が丘中学校長を最後に退職。その後、信濃教育会研究主任として6年間勤務した後、帰郷して飯田市竜丘公民館長を14年間務めた。最後の4年間は飯田市公民館長

会長として、折しも持ち上がった地域自治組織再編の中で公民館の位置づけの交渉に立ち合った。

当初（2003年地域自治組織検討庁内プロジェクト）飯田市は、地域組織の基につくられる住民組織「まちづくり委員会」を構成する地域団体の一つとして公民館を位置づけようとしていた。それまで、社会教育の機関を自負していた公民館関



出版した本を前にする木下さん

係者や公民館活動に熱心な市民からは、市の考え方を訝（いぶか）る意見が続出した。あるメディアは「日本一、公民館の数が多い長野県。「自治の拠点」だっただけの公民館の意義をめぐり、先進地の飯田市で論争が起きた。それは住民が学び、活動する力の今を映し出してはいないか」（2006年1月「信毎」として、1年半11日間にわたってこの論争を連載した。問題は、教育委員会傘下で地域課題に取り組む必要があるという公民館と、公民館も市行政の仕組みの中に取り込むべきと考える自治会の対立に及んだ。

公民館の存在意義を問うこの論争は、識者や関係者など一部の人たちにあって抜き差し

ならない問題であったにもかかわらず、住民にとっては地域や年代によっても温度差があった。公民館活動が盛んで、地区の大多数がなんらかの形で公民館事業に積極的に関わっている地域と、許認可の書類を受け取りに行く支所に付設された機関という以外に関心をもてない住民の多い地区。また、戦中戦後を通じて自治や文化活動の拠点として公民館活動に関わってきた世代と、経済成長期以降、職場が暮らしや経済の中心軸になってカルチャーセンターと大差がないと感じる今の世代の人々もいる。公民館との関わり方の多様性が存在意義を希薄にした観もある。論議は市民的な広がりをもたせることなく、いつの間にか一部関係者たちの組織論に陥り、公民館は地域づくり委員会の一組織ではあるが、教育委員会管轄として、2007年4月、曖昧

（あいまい）な再スタートを切り、今年で5年目を迎えた。

あしかけ3年にわたったこの論議を通して、木下さんは自身の内でも、公民館の存在意義を再検証することを余儀なくされた。退職後もその作業は続いた。自身の暮らす竜丘地区の公民館創設当時の資料や当時の「館報」をめぐる中で、竜丘の風土に思いを巡らし、戦前から続く青年団運動の歴史を遡（さかのぼ）り、先人たちの踏み跡の上に戦後の歩みがあったことを確認できた。ある時「館報」をめぐる木下さんの目に飛び込んだのは「行政は村を守る厳父であり、公民館は村を育てる慈母である」という公民館発足当時の竜丘村長の言葉であった。木下さんはこの言葉に励まされるようにパソコンのキーを叩きだした。本書は、そうした意味で木下さんのたどった思考の検証の記録とも

いえよう。

迷ったら原点に帰れ、という躰（つまず）き脱出の鉄則がある。公民館創立当初想定されていたいなかった様々な価値観や環境の大きな変化の中で公民館も変わっていかねければならないのは事実だろう。しかし、新たな道を探すために、地域の公民館がたどってきた道をもう一度ゆつくりと歩いてみるのも賢明な方法であるのはいうまでもない。あの曖昧（あいまい）な結論は果たしてそうした手順を踏んだのだろうか。お仕着せ、上位下達ではない自治は、自らが学び、参加し、責任を負わねばならない。本書の副題に「自治への憧憬」とある所以である。一読をお奨めする。

本書は、A5判並製本294頁。南信州新聞社刊、定価1890円。お求めは書店まで。（嶋）